

### 3 生活単元学習（障害児教育）

#### 障害児学級における方策

##### 生活単元学習

##### - 「さき織り遊びをしよう」 -

#### (1) 小学校における障害児教育の目標や学習内容のかかわりと研究の視点

京都府の障害児教育の目標は、「障害の状態、発達段階、特性などに応じ、障害に基づく種々の困難の改善・克服を図りながら個性や能力の伸長に努め、心豊かでたくましく生きる力を培う。」（平成14年度「指導の重点」）ことである。

小学校においては、障害のある児童が自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し、将来は仕事に就くなどの社会参加ができるように、生活面や学習面における基礎となる力を身に付けさせることが大切である。

自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばすためには、児童一人一人の障害や発達や個性をよく知ることから始まる。したがって、どの教科においても、一人一人のニーズに応じた特別の支援（教育や援助）が必要となってくる。

教育の内容においても、障害のある児童が、自立し、社会参加するための基盤となる力を身に付けるための自立活動の指導や、障害児学級に在籍する児童や地域の人々と活動を共にする交流教育の積極的な推進が図られている。

各学校においては、障害のある児童の視点に立って、一人一人の特別なニーズを把握し、必要な援助を行うために、地域の状況を踏まえて特色ある魅力的な教育活動を行うとともに、自立を援助していく取組が展開されることが必要である。

「児童の視点に立ち一人一人の特別なニーズを把握し、必要な援助を行う取組」、「自立を援助していく取組」の中で、自己コントロール力や自己肯定感がどのようにはぐくまれていくかを考察する。

#### ア 自己指導能力をはぐくむ視点

##### (ア) 児童に自己存在感を与えること

安心して自分が出せる学級（お互いのよさを認め合える学級）を作る。

家族・友だち・周りの人から認められ、「自分はかけがえのない存在である」と自覚できる取組を考える。

##### (イ) 共感的人間関係をはぐくむこと

友だちと自分の違いを知り、相手を受け入れ一緒に活動できる力を付ける。

##### (ウ) 自己決定の場をできるだけ多く設定すること

今何をすべきか、どうした方が望ましいかなどについて、自分の行動を選択し、決定し、実行しようとする力を付ける。

#### イ 教科独自の指導方法を生かす視点

##### (ア) 他者から、肯定的な関心や評価を受ける。

社会人講師などを活用し、教師以外のかかわりの中でも受容され、ほめられる経験をもつ。

**(イ) 集団での活動を考える。**

他学年と一緒に学習する中で、互いに教え合い共感する関係を作る。(例えば、取組で接点のある学年、交流学級など)

**(ウ) 役割達成感をもたせる。**

自分たちが今までに学習したことを、他者にも教える活動を行うことで達成感をもたせる。

**(エ) 自己への振り返りを促す。**

社会人講師などへの御礼の手紙を書くことで、自分の頑張りやよさに気付いたり、次の課題への意欲をもつ。

できあがった作品を全校児童や教師などに見てもらったり、また取り組んだことを発表する機会を作ることで、自己肯定感を実感させる。

**(2) 自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむための授業改善の在り方**

今回の授業実践では、特に「生活単元学習」を取り上げて研究の視点である授業改善の在り方について考察を行う。生活単元学習とは、自然で実際的な生活活動であり、結果として教科などの内容が多様に含まれていて、生活する力として獲得されるというものであり、つまり、生活上のテーマに沿った一連の活動への取組である。児童の生活上の課題や目標を生活上のテーマとして、児童の興味、関心、思いを大切にしながら単元設定を行っていく。その際に、児童も教師も興味をもち楽しめる活動を考えていくことが大切である。

**ア 生活単元学習の授業の在り方**

**(ア) 生活単元学習の計画・展開上大切にすべきこと**

発達上の課題にあった活動であること(生活年齢にふさわしいことも考慮する)。

自己コントロール力や自己肯定感を育成するためには、様々な環境や条件を整えることが必要である。それは人間としての育ちの中で培われるものである。楽しみながら取り組める発達上の課題にあった活動の中でこそ自己コントロール力や自己肯定感がはぐくまれる。

児童の要求にあった活動であること(児童が主体的に活動できる取組)。

要求や自発性、好奇心等を重視した遊びや体験を通して、ものごとに自分からかかわろうとする意欲が生まれる。その中で達成感や充実感を味わうことができ、自己肯定感が形成される。

地域の施設や人材等を大いに利用した取組であること。

「他者とのかかわり」が自己肯定感の形成に大きくかかわっている。多くの

かかわりを受け、受容され賞賛される経験は、より豊かな自己肯定感につながっていく。また、ダイナミックな活動場面はより意欲をかき立て活動のエネルギーとなる。

できるだけ活動内容を絞り、同じような活動を繰り返すこと。

障害のある児童は、一つのことを理解したり、できるようになったりするためにはより多くの時間がかかり、それを応用していくことが難しいことが多い。また、相手が変わったり状況が変わっても、その活動ができるような自己コントロール力を付ける必要がある。したがって、できるだけ活動内容を絞り、同じような活動を繰り返すことが大切である。そのため、年間計画を立てる際には、活動内容をよく考える必要がある。

#### (イ) 児童主体の活動を促すための視点

集団活動の実現を図るための個別的対応（個別の指導計画）を考える。

一人一人が自分の力で活動する中で、テーマを友だちと共有し、一緒に取り組めるような活動にする。

存分に活動し、満足感や成就感を分かち合えるようにする。

#### イ 物を作る体験

物を作る体験の中では、児童が自ら材料を選択し、基礎的な手順を知らせたり、イメージをふくらませたりするなどの工程で工夫する点が多くあり、自己決定する場もある。障害のある児童は、特に他者からの励ましや評価（ほめことば）によって達成感を味わい、自己肯定感を強く実感する。児童の内面が充実し、やる気を起こさせ、次回には一層工夫してよい物を作ろうという気構えにつながっていく。また、熱中して取り組んだことに喜びを感じ、個性の表現ができるという満足感も得られる。集団での活動を設定したり、社会人講師の方から手ほどきを受けたり、発表の場を設定することにより、他者を共感的に理解することや目標を考えてやりきる力を培ったり、他者の力を借りて解決しようとする等の自己コントロール力もはぐくまれる。

#### 物を作る体験を進める上で大切な視点

(ア) 児童のできそうな教材を準備する。その教材は、一つの形にとらわれることなく工夫し次に発展していける教材がよい。また、障害のある児童は、覚え込みや習熟するのに時間が必要となるので、繰り返し取り組める教材を選ぶことが必要である。

(イ) 手順や基礎的な作業を分かりやすく説明し、工夫できるところは自主的に考えさせる。

豊富な材料を用意し、児童がイメージを膨らませることができるよう援助をする。

(ウ) 地域の施設や人材を大いに利用する。担任は絶えずアンテナを張り、必要で役立つ情報を収集するようにする。単元に取り入れられる物や援助してもらえらる人材、学べる場を見付けることが大切である。

(エ) 単元のもつ独自性を考慮し、一緒に学習する学年や学級を考える。また、交流する時間の設定についても検討する必要がある。

(オ) 児童が学習したことを発表する場を設定する。  
掲示板上に掲示する。  
新聞にまとめる。  
全校朝の会や調べ学習発表会で発表する。  
デイサービスや参観日に発表する。

以上のことを大切にしたい取組の中で、自己コントロール力や自己肯定感は相互作用しながらはぐくまれていくと考える。

### (3) 単元名と単元設定の理由

#### ア 単元名

『さき織り遊びをしよう』

- 年間テーマ -

『私は芸術家』...自然や身の回りの物を使って生活を豊かにしよう。

#### イ 単元設定の理由

物質の豊かさを追求していき、その代償として自然破壊が大きな問題となっている今日、学校では自然体験や環境教育の取組が重視されている。また、家庭でも生活の中に自然のものを使った日用品や装飾品、不要になった物を再利用した作品が取り入れられるようになってきた。

障害児学級には現在2名の児童が在籍しており、2年生と6年生の姉妹である。軽度の知的障害があるが、与えられた課題には興味をもち、一生懸命取り組もうとする積極性がある。しかし、家庭と障害児学級の教室という狭い世界で限られた人間関係や環境の中で生活しているため、社会性の不足や経験の不足がある。また、日常の教科等の学習の中では緊張感の少なさもある。

そうした障害児学級では、生活単元学習の中で、自然や身の回りの物を使って生活を豊かにしていく体験活動や、働く人と触れ合い、その生き方を学ぶことを通して、自分の将来に夢をもつことを大切にしている。そのことを十分に踏まえて、今年度の生活単元学習では、児童が興味をもって活動できる内容を考え、年間テーマを『私は芸術家』とした。一年間に四つの単元(さき織り遊びをしよう、草木染めで遊ぼう、クリスマスリースを作ろう、わらをなう体験をしよう)を設定し、自然や身の回りの物を使って、自分の生活を豊かにしていく体験活動を大切にしていくことにした。また、自然に親しみ、美しさを感じる豊かな感性をはぐくんでいくことも大切にしていきたい。

年間を通して作品を作る活動で、自ら考え判断し行動する力を付けることは、児童自身

が自分を振り返り、自信をもち、自分の頑張りを認めることになっていく。また、そうした活動の中で児童自身が、自己肯定感を実感することへとつながっていく。

また、障害児学級の児童の現状を考えた時に、多くの児童と接する機会を意図的に設定していくことも必要となっている。他学年に教える場や一緒に活動できる場を設定するとともに、できるだけ多くの指導者を招き、接する中で多くの刺激が受けれるようにしていく。また、作成した作品や発見したことなど、この取組で得たことを、ギャラリーを開いたり、新聞で知らせたり、全校調べ学習発表会で取組の発表をすることを通して、全校の児童に紹介していけるように援助していきたい。人前で説明したり、発表することは、恥ずかしさもあるが、自己コントロール力をはぐくむ取組にもなっていく。

#### (4) 単元目標

- ア 手順がわかり、楽しくさき織物遊びをする。 関心・意欲・態度
- イ 自然に親しみ、積極的にさき織物遊びをする。 創造力
- ウ 作品の良さに気付き、生活に生かそうとする。 応用力
- エ 友だちと一緒に活動する楽しさや友だちと助け合ったり、教えあったりして活動する楽しさに気付く。 コミュニケーション能力

#### (5) 単元指導計画（p.67参照）

#### (6) 本時の目標

- ア 織物遊びの仕方がわかり、材料を工夫して楽しいタペストリーを作ることができる。 関心・意欲・態度
- イ 出来上がりを考えて、楽しいタペストリーを作ることができる。 創造力
- ウ 美しい仕上がりになるように考えて材料を使うことができる。 応用力
- エ 作品のよさや楽しさに気付くことができる。 コミュニケーション能力

#### (7) 本時の展開（p.68参照）

#### (8) 指導上の工夫

「さき織り遊び」は、角材等を使って児童に手作りの織り機を作らせることから始めた簡単な織物遊びである。障害のある児童に手作業を教えた経験豊富な社会人講師が、さき織りの手順と作品の完成までを教えた。

一回目は、布の種類が厚地のしっかりした布を切って作った布テープと太いたこ糸を使って手順を教えた。たこ糸（縦糸）は、絡まないように太い糸を使い、糸の両端を同じ色の洗濯ばさみ（おもり）にし、隣の糸と間違わないように工夫した。

やり方がわかると児童の中にはもっと工夫してみたい欲求が生まれ、二回目には、豊富に用意したいろいろな種類や色の布テープからそれぞれが使ってみたい物を選び出した。

縦糸も、細い糸やいろいろな色の毛糸、麻糸等を用意した。次の作業の中では、選んだ材料によっては当然一回目と比較して使いにくいものもあり、苦労しながら作業を進めていかなければならないものもあった。

三回目には、さらに心を開放して何でも取り入れられる柔軟性を育てるため、布以外の材料も多く用意した。材料を考えるといても、障害のある児童の場合、オリジナル的なものを考え出すことには困難さがある。教師の方でドライフラワーや枝、草や紐、リボン、

単元指導計画

単元名「さき織り遊びをしよう」

自己コントロール力をはぐくむ視点を、自己肯定感をはぐくむ視点を で表記

時	指導過程と指導内容	主な学習活動	指導上の留意点	評価 (A:2年生)(B:6年生)	自己コントロール力をはぐくむ視点 自己肯定感をはぐくむ視点
1	<b>基本学習 課題把握</b> ・織物遊びの楽しさを伝え、「さき織り」について説明する。 ・「さき織り」の楽しさに気付かせるため、作品を見せる。	「さき織り」について知る。 ・ボランティアの先生から「さき織り」についての話を聞く。 ・「さき織り」の作品を鑑賞する	・「さき織り」のよさに着目させ、織りたいという意欲がもてるよう援助をする。	・「さき織り」に興味をもち、取り組んでみたい気持ちをもつ。 (A・B)(関)	さき織りの洋服やコースターなどの作品を見てこれから作っていく物への興味をふくらませる。  ボランティアの先生の話聞き、これから取り組んでいくことへの意欲をもつ。
2	<b>課題設定</b> ・手順を知らせ、工夫して「さき織り機」を作らせる。	「さき織り機」を作る。 ・角材やくぎなどを使って「さき織り機」を作る。	・作業がうまくいくようあらかじめ切り目を入れたり錐で穴を空けておいたり下準備しておく。 ・安全に作業ができるように、技術的な指導と助言をする。	・手伝ってもらい織り機を作ることができる。(A)(関) ・手本の織り機を見て進んで作ろうとする。(B)(関)	細かな手順をていねいにやりきろうとする態度をもつ。 手順通り組み立てていけば手製の織り機ができるおもしろさに気付く。
1	・自然に親しみをもたせ、楽しみながら「さき織り」製作をさせる。	「さき織り」に挑戦しよう。 ・「さき織り」の織り方を知る。	・布テープと糸がうまく絡むよう、技術的な助言と援助をする。	・自然に親しみをもち、工夫し楽しんで活動できる。 (A・B)(創)	織り方を覚えようとする。 作業を進めると布テープが織物になっていくおもしろさに気付く。
2	<b>応用学習 課題追究</b> ・友だちと活動する楽しさをもたせつつ、「さき織り」でコースター作りをさせる。	「さき織り」でコースター作りをする。 ・たて糸の太さや材料、布の種類や色を自分で考えてコースターを作る。	・できるだけたくさんの種類のため糸や布テープを準備し、選ばせる。  ・コースターにするための最後の処理など助言や援助をする。	・楽しんで活動できる。 (A・B)(関) ・作品のよさに気付く。 (A・B)(応・関)	材料を自己決定する。  よりきれいな織り方を見付けようとする。  粘り強く織っていく。
1	(本時) ・材料を工夫して用いて、タペストリー作りをさせる。	タペストリーを作る。 ・色々な材料を考えて、自由な発想でタペストリーを作る。	・個々の児童のこだわりを大切にしたい物が上手くできるように援助をする。 ・作っていく過程で良いところを誉め、励ます。	・作りたいものを見付けることができる。(A・B)(関)	自分の表したいものを見付けるためにいろいろ挑戦してみようとする。 がんばった達成感をもつ。
1	<b>発信学習 まとめ</b> ・「さき織り遊び」の楽しさを振り返り、お互いの作品のよさに気付かせるとともに、お世話になった先生にお礼の手紙を書かせる。	ボランティアの先生にお礼の手紙を書く。	・この活動で学べたことを感謝の気持ちで表せられるようにする。 ・学習したことを今後どう生かしていくかを考えて書くように援助をする。(さをり織りにつなげる)	・お礼の手紙が書ける。 (A)(コ) ・さき織りをして自分がかんばれたこと、作品のよさ、これからの展望などの思いが書ける。 (B)(関・コ)	意欲的に手紙を書く。  受け取る側の気持ちを考えて、手紙を書く。 「さをり織り」への意欲をもつ。

評価について (関): 関心・意欲・態度 (応): 応用力 (創): 創造力 (コ): コミュニケーション能力

## 本時の展開

過程	指導内容	指導形態	主な学習活動	指導上の留意点	教材 教具等	評価
導入	作り上げたさき織りの作品を見せて、今日の作品作りへの期待をもたせる。	一斉	さき織りについて思い出す。 ・前時のコースター作りのビデオを見る。 ・頑張ったことや楽しかったこと、分かったこと等話す。	頑張って作製した織り機や出来上がった作品を見ながら、今までの過程を思い出せるよう援助する。	・ビデオ ・写真 ・織り機 ・作品	ビデオや織り機や作品を見て、自分の思ったことが発表できる。 関心・意欲・態度 さき織りの感想や特徴など分かったことが発表できる。 関心・意欲・態度
	活動のめあてを知らせる。	一斉	活動のめあてを知る。 ・布に変わって使ういろいろな材料を考え、それを使って作品を作ることを知る。	柔軟な考えが出るよう助言をする。		使ってみたいものをいろいろ考えることができる。 創造力
展開	使いたい材料を自分で選択させ、楽しみながら工夫したタペストリー作りをさせる。	個別	材料を工夫してタペストリーを作る。 ・いろいろな材料から、自分の使ってみたい材料を選択し、自由な発想で作品を作る。	使いたい材料が自由に使えるよう、児童の意見を想定して、材料をそろえておく。 表したいものがうまくできるよう援助していく。 個々の思いやこだわりを大切に助言をする。 光るラメ入りマニキュアを付ける。	・極太毛糸 ・和紙 ・マカロニ ・枝、葉、葉 ・ドライフラワー ・ひも ・ビーズ ・ラメ入りマニキュア	楽しんで材料を選び使うことができる。 創造力 見栄えがよく美しい仕上がりになるように考えて材料を使うことができる。 応用力
	互いの作品を見せ合わせて、工夫したところを見付けさせる。 作った作品を掲示させる。	一斉  個別	二人の作品を見合せて、頑張ったところ、工夫しているところを見付ける。  出来上がりを教室の入口のリースにつるす。	頑張って作れたところや工夫しているところを見付け合い評価し合えるようにアクセントを付けるなどの工夫点を紹介する。  未完成の場合、そのままではいけないようにするよう声かけをする。		作品のよさや楽しさに気付くことができる。 コミュニケーション能力
まとめ	互いの作品を鑑賞させる。	一斉	つるした作品を鑑賞する。 次時の予定を知る。	自分の作品への思いが話せるよう援助をする。		

ビーズやマカロニ等も用意した。戸惑いが見られるかと思われたが、スムーズに作りたいものを考えて作業する姿が見られた。時を同じくして、5年生が『さをり織り』の取組を実践されている時でもあり、『さをり織り』の講師の方に来ていただいた際に、障害児学級の児童も教えてもらい、教室にも織り機を設置した。たくさんの多彩な色の糸をもらい、休み時間に自由に織物が楽しめる環境となった。5年生との接点もでき、一緒に作業することができるようになった。

また、年間テーマ『私は芸術家』に沿って、二学期は、一学期の取組を大切に、さらに充実した取組になるよう『草木染めで遊ぼう』と『クリスマスリースを作ろう』を設定することにした。

自然の材料は豊富である。染め物の刷り染め等の技術を教え、工夫することで、さらに面白くなるようにする。この取組では、3年生のお茶の学習との接点があるため、一緒に共同作業所の方からお茶染めの方法を学び作業する時間も設定する。昨年、交流学級として劇遊びや多様な取組を行ってきた学年でもあり、大きな集団でもすぐにとけ込み、一緒に活動し認め合い、教え合う関係ができると考える。また、児童が自分の染めたいものが自然の中でどのような一生を送るのか、木や花や実等の実物や映像を見せることで、そのありようにも気付かせ、自然の豊かさを充分に実感させることも目標とする。

リース作りでは、電車に乗ってつるを取りに行く活動を入れることで、より意欲をもった取組が実践できると考える。

三学期には、お正月の学習からしめ縄等の伝統的しきたりを考え、自ら縄をなってみる体験をする。もちろんこの取組においても、地域の社会人講師を招いて日本の伝統についても考える機会とする。

## (9) 児童の変容

この「さき織り遊びをしよう」の活動では、織り機の作成から様々な作品を完成させていく過程において、児童は粘り強く自分の納得のいく作品へと仕上げていった。このことは、児童が自立的に、また主体性をもって活動に取り組んでいたことの現れであると考えられる。

今回のこの活動では、用意した材料を自分で選択し工夫していこうとする児童の姿も多く見られた。その結果として、児童は自分の目標としているものを少しずつ変えていったり、他者の作品のよさや意見を取り入れていこうとした。こうした活動において、児童自身がよりよい物を作ろうと自己を向上させていく姿が見られたが、そうした過程の中に自己コントロール力が働いていたと思われる。

自分が一生懸命したこと了他児の作品もていねいに鑑賞し、他児の作品のよいところを見付けられる力も付けていった。この中には、児童一人一人の達成感や充実感があり、自己肯定感を実感することができていた。

作品を掲示した時、全校の児童や教職員から多くの賞賛を受け、さらに自信が付き満足感を味わうこともできた。それは、講師の方への御礼の手紙にも表れていた。

作品(物)を作ることを通して、指示されなくても自分で問題解決できる力を付け、少しずつ判断力も付いてくるのではないかと推測する。そして、このことは「生きる力」へとつながっていくと考える。

また、交流教育の一環として同じような織物の取組を5年生とともにすることで、児童の中に「物を作る体験」を友だちと共有した喜びも生まれ、満足感とともに次の活動への意欲付けにもつながっていった。



## (10) まとめ

京都府の障害児教育の目標は、冒頭で述べたとおりである。

目標を達成するため、障害児学級においては、児童生徒の障害の状態や発達段階、特性などに応じてよりよい教育環境を整え、適切な教育課程を編成し、指導内容・方法等について様々な授業改善の工夫が行われている。

また、交流教育を教育活動全体に位置付け、計画的・継続的に推進することの一環として、小・中学校の障害児学級の児童生徒と地域の人々が積極的に活動をともにすることも図られている。

各学校においては、障害のある児童生徒の視点に立って、一人一人の特別なニーズを把握し必要な援助を行うために、地域の状況を踏まえて特色ある魅力的な教育活動を行うとともに、自立を援助していく取組を展開していくことが必要である。

「児童の視点に立ち一人一人の特別なニーズを把握して、必要な援助を行う取組」、「自立を援助していく取組」の中で、自己コントロール力や自己肯定感がどのようにはぐくまれるかを考えていくことが、障害児教育においても問われているところである。

今年度の授業実践では、障害児学級における生活単元学習の授業改善の在り方を検討していく中で、障害のある児童に対する自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむ視点について考察を深めてきた。

生活単元学習としての『さき織り遊びをしよう』という単元では、自然の物に触れる体験や自ら興味と関心のある「物を作る体験」の中で、上述のような児童の変容の姿が見られた。「物を作る体験」活動を通じた児童の変容の背景には、この取組（活動）が、生活単元学習として児童の「発達上の課題にあった取組」「児童が主体的に活動できる取組」などであったと思われる。特に、「さき織り遊び」の中に自然の物を教材として取り入れたことで、児童が自ら考えるとともに工夫していくことができ、個性あふれる作品を作ることへとつながっていった。互いの作品のよさに気付くとともに、友だちと助け合ったり、教え合ったりする中で、一人一人の児童が達成感や成就感を味わえたことが、自己コントロール力の育ちや自己肯定感をはぐくむことにつながっていったと思われる。

障害児学級における生活単元学習の年間テーマとして『私は芸術家』を設定し、四つの単元の取組を考え、その中で児童一人一人の特別なニーズを把握し必要な援助を授業の中で展開していくことで、年間を通してさらに自己コントロール力や自己肯定感が培われていくと考える。また、四つの単元を進めていく中で、授業改善の視点も明らかになるとと思われる。

しかし、障害児学級においては、生活単元学習等の授業だけではなく、日々の学校生活全般の中で研究主題にかかわる面も多くある。その点についてまとめておくことにする。

**障害児学級において、自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむ  
ために大切にしていきたいこと**

**ア 毎日「朝の会」でテーマを決めて話す。**

「昨日のこと」「僕の宝物」「家族のこと」「ビッグニュース」などのタイトルを決めて、自分の思いや考えを相手に分かるように話す力を付ける。また聞く方は、話にじっくり耳

を傾け、分からない時は質問する等、他者を理解しようとする気持ちを育てる。これは、まさに自己コントロール力を身に付けることにつながり、言いたいことや思いが伝えられた経験は、自己を肯定的にとらえ、自信へとつながる。

#### イ いろいろな集団での活動を考える。

(ア) 交流教育の場で自己コントロール力を付ける。通常の学級の児童と生活や学習の場をともにすることによって生活経験を広め、社会性を養い、好ましい人間関係を育てることを大切にする。

- ・ 交流学級と一緒に活動できる学習内容については、合同学習を計画していく。
- ・ 各学年と交流することを計画する。  
日常的に交流する掃除の取組や七夕祭り等行事の取組を学年に合わせて考える。
- ・ 交流学級で行事や学習を一緒に行う。

(イ) 近隣の学校と合同学習を計画する。

他校の障害児学級も少人数化してきているため、集まって同じ発達段階、特性などのある児童同士で集団活動をする場を考える。集団活動を通していろいろな友だちのかかわり方や遊び方を知ることとはとても大切である。かかわりの中では、楽しいだけでなく、摩擦も生じるが、それらを乗り越えることによって自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむことになる。

#### ウ 取り組んだことについて、発表する場を設け全校に知らせていく。

(ア) 学習したことを取り入れた掲示物を障害児学級の掲示板に月毎に貼り出す。教師からほめてもらったり、他の学級の友だちが立ち止まって観てくれる様子を見ることで表現する喜びを感じることができる。

(イ) 全校発表の場（全校朝の会・学校祭り・調べ学習発表会・6年生を送る会等）に、参加する。

恥ずかしいけれど、助けてくれる友だちや教師がいるという励ましがあがり、頑張って発表することで、達成感や成就感をもつことができる。

障害児学級では、こうした視点を踏まえた上で、今回取り上げた生活単元学習だけではなく、日常の生活や学習において、一人一人の児童の実態（発達課題を含め）把握を大切にしつつ、「自己コントロール力が育ち、自己肯定感が実感できる学習の在り方」として授業改善の視点を考えていくことが、今まさに問われているところである。